

ブラック小屋の錆びた金属のにおいに、軒先で売っているケバブや果物、焼き菓子といった食べ物、そして茶や菓のにおいが混じり合う。

この世界では、大きな街のいわゆる大通りでも、そんな光景は珍しくない。

世界はかつて、魔王フォウルダートの手によって滅亡の危機にさらされた事がある。魔王は怪物を各地に放ち、街や村を襲って、人々を混乱に陥れたそう。

その時、『双銃士』と呼ばれる、精神力を銃の形に変える能力を持つ戦士が立ち向かい、怪物たちを撃退し、魔王の頭を撃ち抜いて、平和を取り戻したらしい。

それが約八年前の事だから、十歳の僕が物心つくかつかないかの頃の出来事だ。

魔王の手によって壊滅的な被害を受けた世界は、それまで持っていた繁栄を失い、緩やかな回復を余儀なくされ、今でも雑然とした街並みをさらしている。

だけど、僕には関係無い。気づいた時には世界はもうこ

の有様で、慣れ親しんだ環境になっていたのだから。

だから僕が街に着いてすべき事は、いつも同じ。所狭しと店が並ぶ通りを行き交う人の間を、小柄な身体ですり抜けて買うは、彼女の好きなアップル・パイをツーピース、ファーストフラッシュのダーズリンを一袋、今日のタブロイドを一部。

『怪物はいまだに居なくなっていないのか！ 地方での被害やまず』

黒地に白抜き文字がでかでかと一面に躍るその片隅には、『伝説の双銃士クリストファー・エディンは何処へ消えたのか？』

などという、居るかどうかもわからない人探しコラムが書かれているのだから、世界はまあまあ平和な方なんだろうな、と思ってしまう。どのみち僕には関係無い事だ。

「坊や、お母さんの手伝いかい？ 偉いねえ」

残ったお釣りを使って駄菓子屋でヘーゼルナッツのボンボンを買おうと、店のおばさんはそうやって笑いながら、僕

のつるつるの頭を撫でる。太陽に照らされるとピッカピカに光る僕の頭。彼女が毎晩お風呂で丁寧に剃ってくれる、僕の自慢の頭。

彼女は母親なんかじゃない。全てを失って途方に暮れていた僕を拾ってくれた、もっと大切に綺麗で素敵な、僕の保護者だ。

荷物を抱えて通りを過ぎ、鉄筋コンクリート造りの、この街では一番まともな宿に入る。階段を昇って扉を開ければ、

「おや、お帰り、クリス」

シャワーを浴びたてなのだろう、タンクトップにショーツ一枚、バスタオルを頭からかぶった背の高い女性が、きらりと輝く笑顔を見せた。

「ああ、買い物ご苦労だったね。そこに置いといてくれるかい」

彼女は何て事は無いような調子で、テーブルを指差す。

普通の男子なら、彼女の豊満な胸にまず目をやり、次にそ

の姿に取り乱して、慌てて扉を閉める所なんだろう。だけど僕はこれしきで動揺したりしない。いつもの事だ。

なおかつ、彼女と一緒にお風呂に入って、身体を洗ってもらう事もあるので、彼女の肢体がいかにも美しいか、ボンキュッボンがいかほどか、その長く波打つ黒髪が濡れて頬に張り付く様がどれだけ艶めかしいか、よく知っている。パーム。パーミュン・ヴィノワ。僕の大好きな、魔女。

パームと出会った時の事は、実はよく覚えていない。

始まりは雨の音。気づいたら僕は辺境村の宿のベッドに寝ていて、窓際に座ってぼんやりと外を眺めていた彼女が、僕の覚醒に気づいてふうつとこちらを向いたのだ。

その途端、静かに雨が止んでゆき、雲間から顔を出した太陽が彼女を照らし出した、その時の感想は、筆舌に尽くしがたい。だが、僕の貧困な語彙ボキャブラリーを総動員して言わせてもらうならば、彼女はどんな神話の天上におわす女神たちより麗しい、地上に舞い降りた天使だった。

年齢を訊いた事は無い。レデイに歳を訪ねるのは鞭打ち
されても文句を言えないくらいは無礼だとは知っているの
で、想像するだけだが、恐らく二十代半ば。背に流れる黒
髪は、まさに天使の輪がかかる程のキューティクル。瞳の
色は、僕は見た記憶が無い大海原の青。鼻は小さめですら
りとしていて、唇は血色良くふっくらつやつや。きめ細か
い肌は、初めてお風呂で触った時には、張りも弾力もあり
もちもちで、得も言われぬ感動を覚えたものだ。

……話が逸れた。

とにかく出会った時のパームは、輝くような笑顔を浮か
べながら、ベッドの上へ身を起こした僕のもとへ歩み寄っ
て来ると、指が細長くて綺麗に形の整った爪をした手を僕
の頬に当てて、耳元でささめくように、言った。

「私はパーミュン・ヴィノワ。パームって呼びな。あんた
はクリス」

そうして、紅ののった唇を見事な三日月形に象って、僕
の口元にすっと人差し指を寄せた。

「クリス。あんたは私が居る限り、無敵だよ」

↓
↓
↓
つつきは

《おねシヨタ》アンソロジー『∞-infinity』で！